日田市埋蔵文化財調査報告書第 73 集

長者原遺跡

長者原遺跡
日田市埋蔵文化財調査報告書第73集
2006年
日田市教育委員会

2006年

日田市教育委員会

序　文

この報告書は、当教育委員会が鉄塔建設に先立ち、平成17年度に株式会社ＮＴＴドコモ九州の委託を受けて発掘調査を実施した長者原遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では、弥生時代～古墳時代の溝や土坑などが発見され、各時代の土器が出土するなど貴重な成果を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事していただきました皆様方や調査にご協力を賜りました関係者の方々に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成18年8月

日田市教育委員会

教育長　諫山　康雄

遺跡遠景（日田市内を望む）

例　　言

１．本書は、日田市教育委員会が平成１７年度に実施した長者原遺跡６次の発掘調査報告書である。
２．調査は鉄塔建設に伴い、株式会社ＮＴＴドコモ九州の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
３．調査にあたっては九工建設株式会社の協力を得た。
４．調査現場での実測・写真撮影は渡邉が行い、杉野貴幸（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
５．本書に掲載した遺物実測は渡邉が行い、製図は中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
７．空中写真撮影は株式会社九州航空に委託し、その成果品を使用した。
８．遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
９．本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。
10．写真図版に付している数字番号は挿図番号に対応する。
11．出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12．本書の執筆編集は渡邉が担当した。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過と組織・・・・・・　1
Ⅱ　遺跡の立地と環境・・・・・・・・　2
Ⅲ　調査の記録・・・・・・・・・・・　4
Ⅳ　まとめ・・・・・・・・・・・・・　10

写真図版目次

写真図版１　調査区空撮
写真図版２　溝
写真図版３　土坑
写真図版４　土坑、出土遺物

本文写真目次

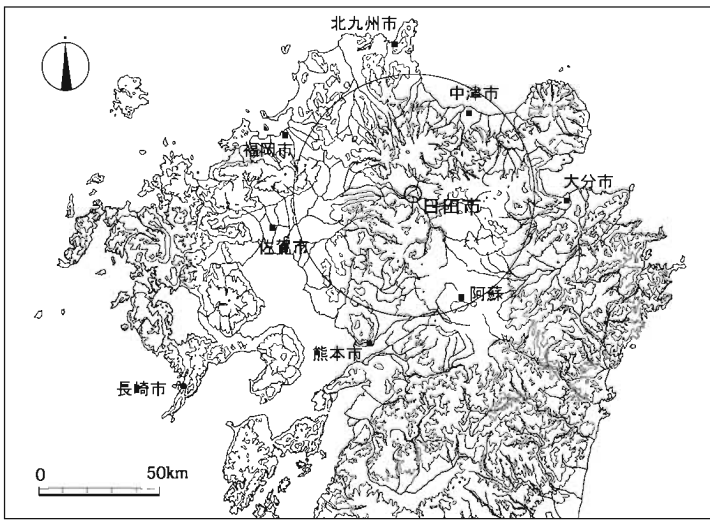
写真１・２　作業風景・・・・・・・・　1
写真３　　基本土層・・・・・・・・　5

挿図目次

第１図　調査区周辺地形図（1/1000）・　1
第２図　周辺遺跡分布図（1/20,000）・　2
第３図　調査区配置図（1/2500）・・・　3
第４図　遺構配置図（1/80）・・・・・　4
第５図　基本土層（1/40）・・・・・・　5
第６図　溝実測図（1/40）・・・・・・　6
第７図　土坑実測図①（1/40）・・・・　7
第８図　土坑・倒木痕実測図②（1/40）・　8
第９図　出土遺物実測図（1/3）・・・・　9

表目次

第１表　出土土器観察表・・・・・・・　10



日田市の位置図

Ⅰ　調査に至る経過と組織

平成 17 年 11 月 18 日付けで九工建設株式会社より市教育委員会へ、日田市大字小山字沖原 192 番 1 でのＮＴＴドコモの鉄塔建設に先立つ事前の照会文書が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である長者原遺跡に該当し、これまで５次に渡る調査がなされ、周辺には穴観音古墳が所在することなどから、その取り扱いについての協議が必要である旨の文書回答を行った。申請者との事前協議を重ねる中で、対象地の全面が掘削されることから遺跡の保存は困難で、また事業対象地の隣地を過去調査しており、弥生時代の住居跡や古墳時代の墳墓群などが発見されていることなどから、対象地約 110 ㎡の発掘調査が必要であると判断した。

その後、申請者と協議を行い、契約書は開発主となる株式会社ＮＴＴドコモ九州と取り交わすこととなり、12 月 10 日に委託契約を取り交わし、翌年 1 月 23 日から 3 月 13 日まで発掘調査を実施した。整理作業は 6 月 20 日から 6 月 30 日までの期間実施し、報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。

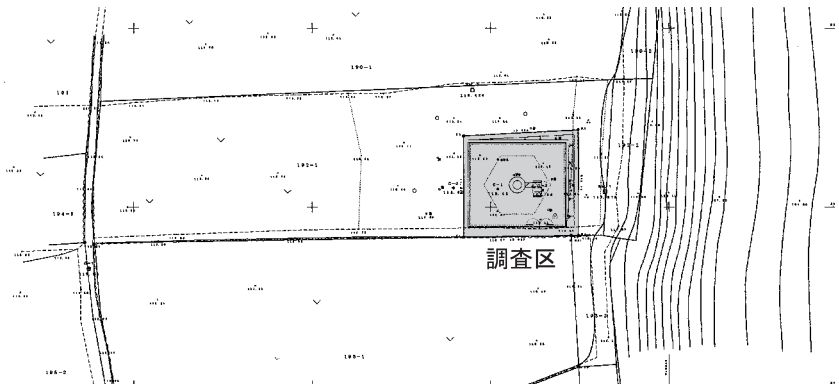
１月２３日　人力による表土除去作業を開始する。
２月　２日　表土除去作業が終了し、遺構検出作業を開始する。
２月　３日　遺構の掘り下げ作業を開始する。
２月２１日　遺構の掘り下げが完了し、遺構実測作業を実施する。
２月２８日　空中写真撮影を実施する。
３月　２日　埋め戻し作業を開始する。
３月１３日　埋め戻し作業が完了し、機材を撤収して調査を終了する。

写真 1　調査作業風景

なお、調査組織は次のとおりである。

平成 17・18 年度

調 査 主 体　日田市教育委員会
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調 査 統 括　後藤　清（同文化財保護課課長）
調 査 事 務　髙倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、田中正勝（同専門員〔平成 18 年度〕）
　　伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）
調 査 担 当　渡邉隆行（同主任）
調　査　員　土居和幸（同副主幹〔平成 17 年度〕）、今田秀樹（同主任）、行時桂子（同主任）若杉竜太（同主任）
　　矢羽田幸宏（同主事補〔平成 18 年度～主事〕）
調査作業員　桜木順子、高倉澄江、原田保枝、中村洋子、野村クミ子、野村浪子、宮崎キミエ、森山浩幸
　　森山キクヨ、柳瀬明子、吉田ヤフミ
整理作業員　鍛治谷節子、平川優子



第 1 図　調査区周辺地形図（1/1000）

写真 2　調査作業風景

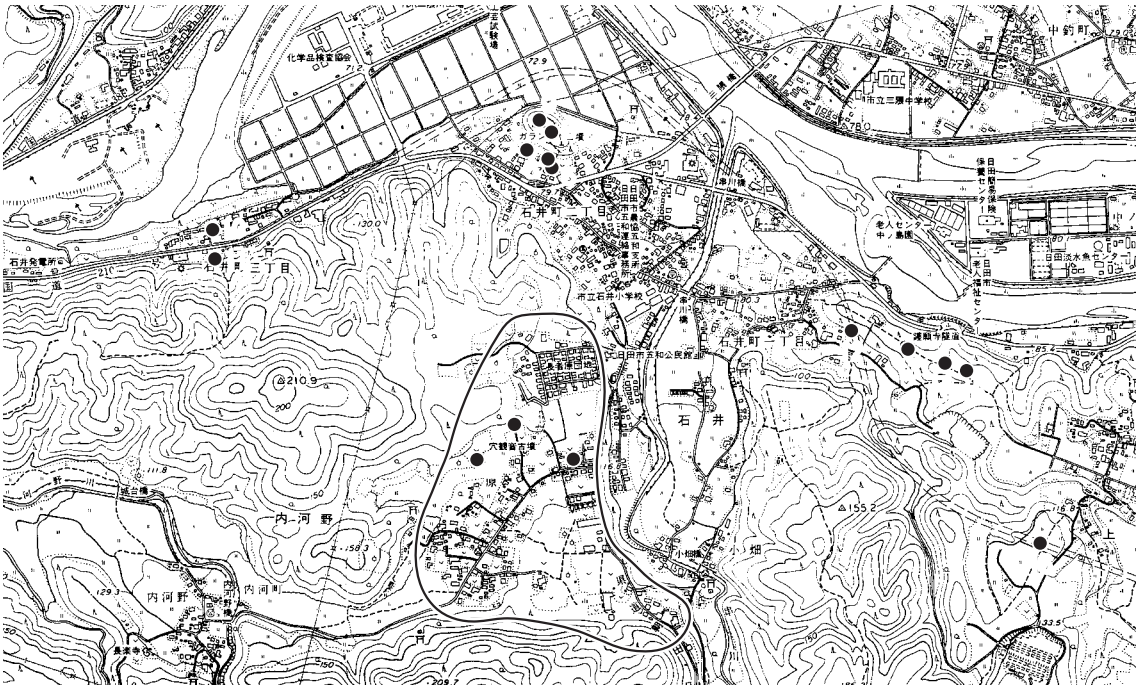
Ⅱ　遺跡の立地と環境

長者原遺跡の所在する通称「原（はる）」と呼ばれる台地は、日田盆地の南西部、三隈川の左岸に位置し、標高約 120m を測る。台地東側は比高差約 30 mほどの崖面となり、三方は低丘陵に囲まれ、東には串川、西には内河野川がそれぞれ北流して筑後川と合流する。台地上は平坦面を形成し、主に水田や畑地などの農地として利用され、周辺の丘陵及び斜面部は杉林で覆われている状況にあるが、長者原団地建設以後は住宅建設が増加する傾向にある。

周辺の遺跡を概観すると、台地全域が長者原遺跡[1]として周知されており、遺跡の中心部には国指定の装飾壁画を持つ穴観音古墳[3]が所在している。また、本調査区の南側には現在消滅しているが、横穴式石室を主体部とする倉園古墳[4]があったとされる。台地を北側に下った三隈川が大きく蛇行する箇所には独立丘陵である隈山が所在し、この丘陵上には縄文時代の土偶などが採取され、中世後半の墓地が確認されている隈山遺跡[9]、小型の横穴式石室構造を持つ隈山古墳[8]が位置する。また、丘陵南側には 2 基の装飾古墳を含む 3 基の円墳からなるガランドヤ古墳群[5,6,7]が所在し、さらに三隈川を下った西側には横穴式石室を主体とする円墳の津辻古墳群[10,11]が見られる。台地東側の串川対岸には縄文時代～中世・近世に至る遺構・遺物が調査された寺内遺跡が所在し、三隈川と併行して張り出した護願寺の丘陵上には 1 基の前方後円墳と 2 基の円墳からなる護願寺古墳群[13,14,15]が所在する。さらに東の上野原台地上には弥生時代中期初頭の小児用甕棺墓群が調査された上野第 2 遺跡[16]がある。

さて、長者原遺跡はこれまでに 5 次にわたる発掘調査がなされている。1 次調査では旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代後期の竪穴住居跡、2 次調査では古墳時代後期の竪穴住居跡、3 次調査では縄文時代の土坑や柱穴、4 次調査では縄文時代早期の包含層や集石遺構、弥生時代後期前半から古墳時代初めの環濠、古墳時代前期から中期の竪穴式石室や箱式石棺が発掘され、縄文・弥生土器を初め鉄器類が多数出土し、5 次調査では中世～近世の炭窯が発掘されている。このほか長者原田迎遺跡[2]の調査では、弥生・古墳時代から古代・中世期の竪穴住居跡や掘立柱建物などが発見されている。

火山灰堆積が良好なことから旧石器・縄文時代の包含層が顕著に認められるという特徴のあるこの遺跡は、昭和 48 年の長者原団地造成の際には、多数の遺物の出土が見られたとの地元の話があるなど、それ以後の弥生時代から近世に至るまでの遺構が残る市内を代表する複合遺跡でもある。



1. 長者原遺跡
2. 長者原田迎遺跡
3. 穴観音古墳
4. 倉園古墳
5. ガランドヤ 3 号墳
6. ガランドヤ 1 号墳
7. ガランドヤ 2 号墳
8. 隈山古墳
9. 隈山遺跡
10. 津辻 1 号墳
11. 津辻 2 号墳
12. 寺内遺跡
13. 護願寺 1 号墳
14. 護願寺 2 号墳
15. 護願寺 3 号墳
16. 上野第 2 遺跡

第 2 図　周辺遺跡分布図（1/20,000）

《参考文献》

土居和幸編　「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ・Ⅱ』日田市教育委員会　1986・1987 年

土居和幸編　「長者原遺跡」『平成９年度（1997 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999 年

渡邉隆行編　「長者原遺跡４次」『平成 12 年度（2000 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001 年

行時志郎編　『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第５集　日田市教育委員会　1992 年

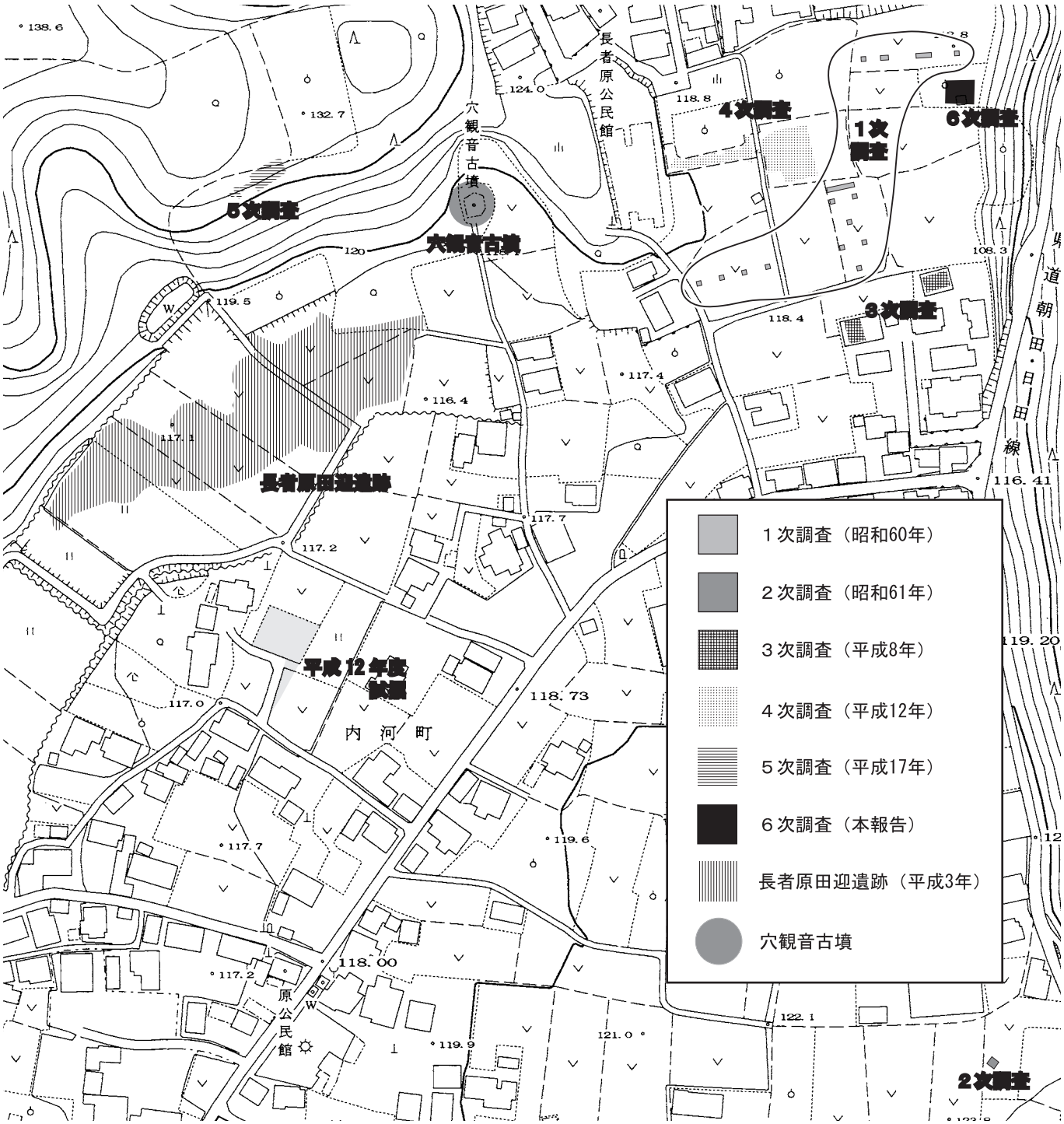
若杉竜太編　『穴観音古墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第 41 集　日田市教育委員会　2003 年

土居和幸編　『穴観音古墳Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 55 集　日田市教育委員会　2004 年

※長者原遺跡５次は平成 17 年度に調査を実施した。

※隈山古墳は平成 17 年度に地形測量を行い石室の存在が確認されたが、安全のため埋め土保存されている。

※なお、これまで平成１２年度試掘調査箇所を５次調査としてきたが、遺跡の存在が確認出来ていないことから、平成 17 年度調査箇所を５次調査、今回調査箇所を６次調査として、本報告より改めることとする。



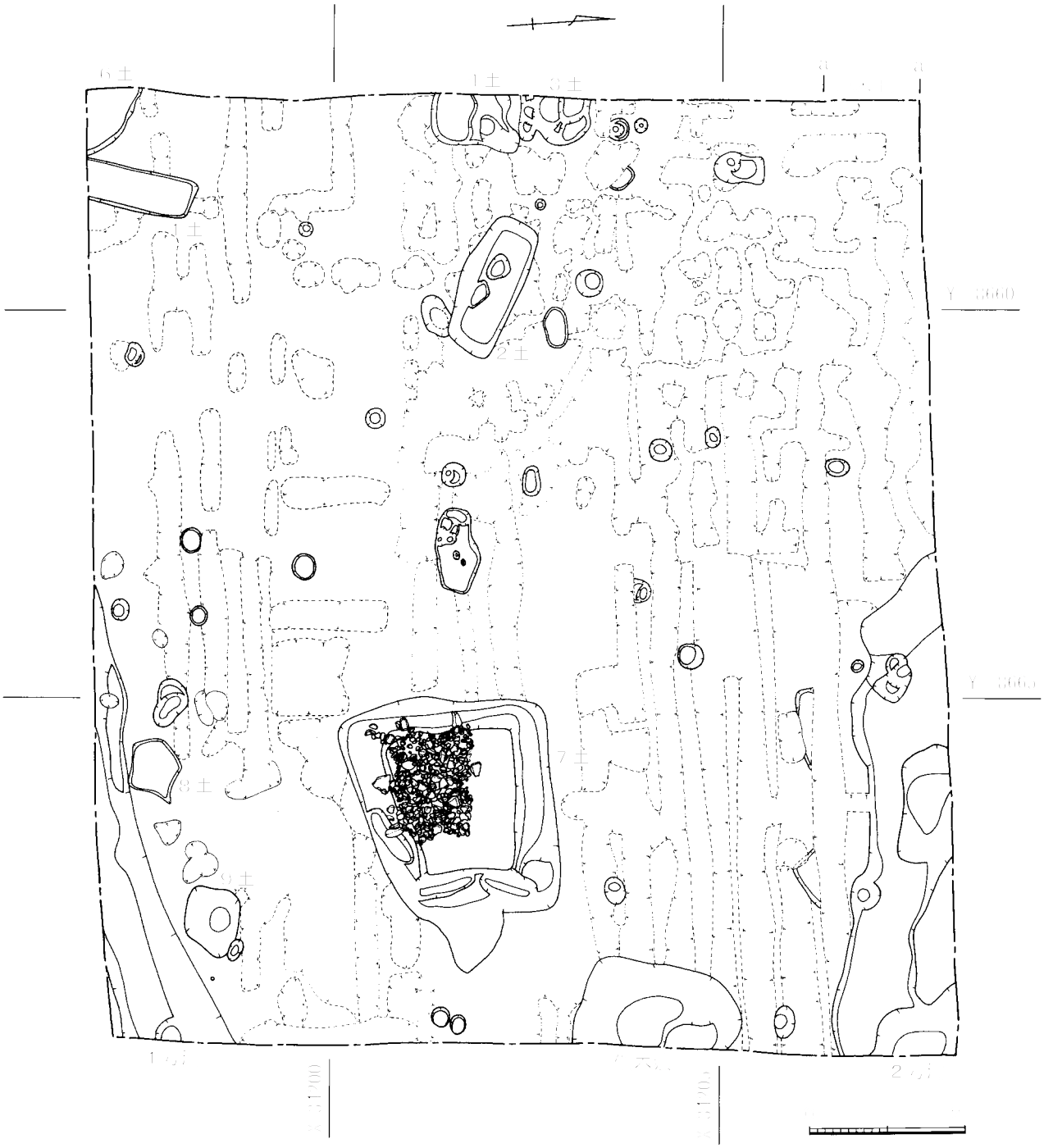
第３図　調査区配置図（1/2500）

Ⅲ　調査の記録

（1）調査の概要（第４・５図）

今回の調査は対象地周辺が畑地として利用され、機械の搬入が困難であると判断されたことから、これまでの周辺調査結果を参考としながら、人力により表土の掘り下げを行い、遺構の確認を行った。調査区は東西約12m、南北約 11m の方形状を呈し、ほぼ平坦な地形であるが、調査区の東側 3m ほどから極端な崖面が形成されている。

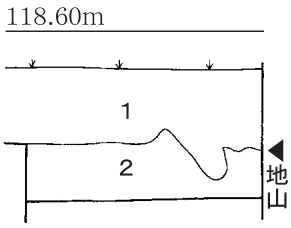
検出面は黄褐色ローム土で、近年の天地返し等による攪乱が著しく、遺構検出面は激しく攪乱を受けていた。検出面上面の黒褐色堆積土も黄褐色土ブロックが混じる状況で、殆どが攪乱層と判断された。これら攪乱を除去



第４図　遺構配置図（1/80）

し確認された遺構は溝２条、土坑９基、ピットである。これら遺構の埋土は１号溝、１・３・４号土坑が黒褐色土、２号溝、２・６号土坑が淡黒褐色土、８～10号土坑が褐色土を呈しており、７号土坑は黒色土、褐色土が混じり、黄褐色土ブロックが混入していた。なお、５号土坑に関しては当初遺構番号を割り振っていたが、後に攪乱と判断したことから、欠番としている。

写真３　基本土層



1. 黒色土、黄褐色ブロック混
2. 黄褐色ローム（地山）

第５図　基本土層図（1/40）

（２）遺構と遺物

１号溝（第６図、図版２）

調査区南側壁面にて検出された溝で、大半が調査区外へと伸びている。確認面での規模は、最大幅で約 1.3 m を測り、断面形はＵ字状を呈する。深さは東側が最も深く約 60cm を測り、西側へ行くほど浅いことから西から東へと傾斜し、崖面へと流れていたものと考えられる。埋土は、６～８層がしまりがなく、黄色系であることから、地山崩落による自然堆積層の可能性が高く、１～５層は２次的な堆積による埋没層と想定される。

出土遺物（第９図、図版４）

１、２は弥生土器甕の破片である。２は内外面共に縦ハケが施される。出土遺物が少ないことから詳細な時期比定は困難である。

２号溝（第６図、図版２）

調査区北壁側にて検出された溝で、北半は調査区外へと伸びている。確認面での規模は、最大幅で約 1.6m を測り、断面形は浅いレンズ状を呈する。床面は歪な形をしており、場所によっては深くなる箇所なども見られる。深い所で約 50cm を測り、東側へ若干低くなっており、蛇行して東西方向に伸びるものと想定される。埋土は褐色系の互層堆積を呈している。

出土遺物（第９図、図版４）

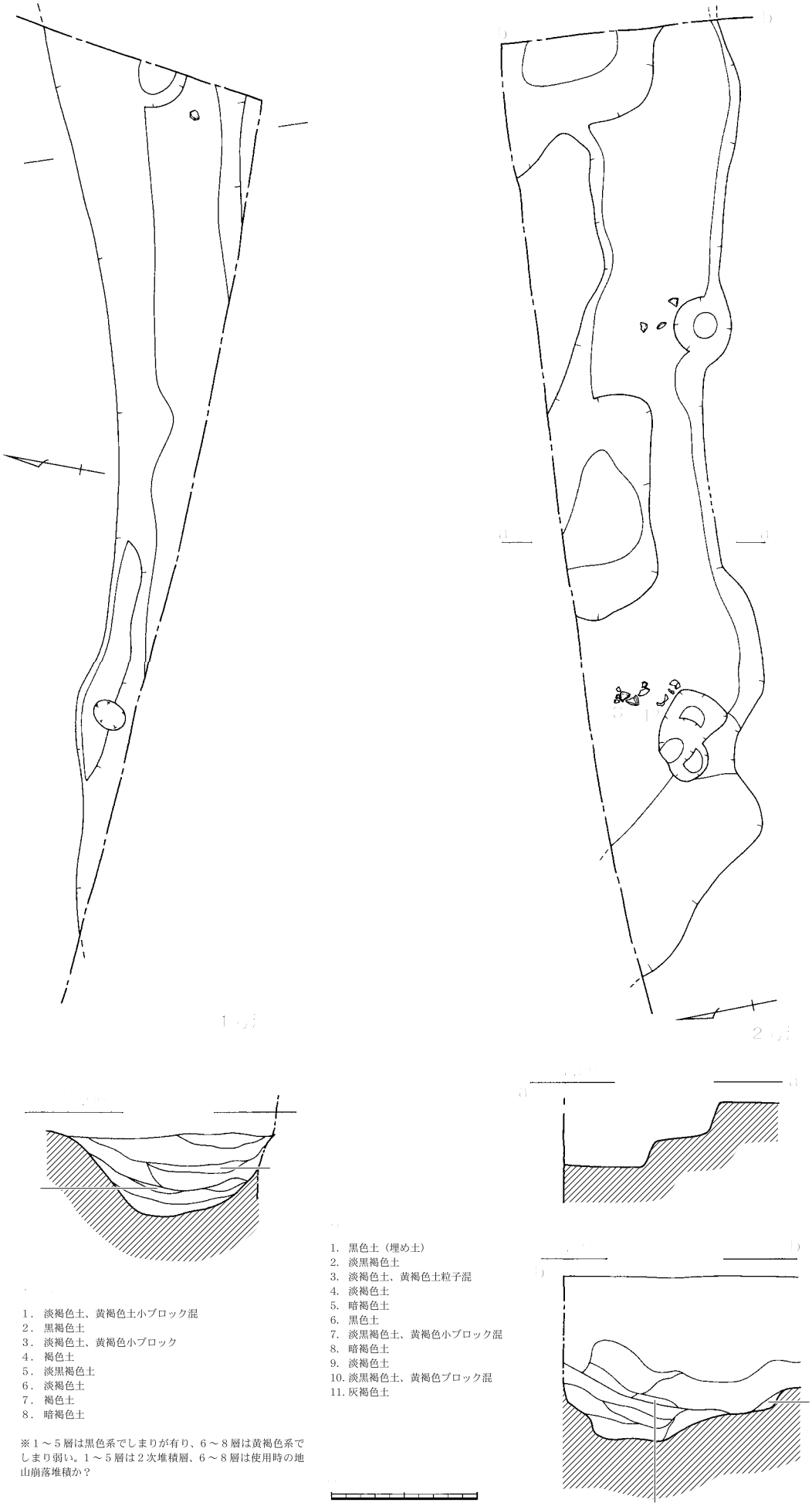
３～14 が２号溝より出土した。３～６は須恵器坏蓋であり、３・５は天上部との境に凹線状の段を有し、３は口縁端部内面に段を有する。また、３は内面にヘラ記号が施される。７は須恵器坏身で、８は須恵器甕である。9・10 は土師器甕で、10 は外面に横ハケが施される。11 ～ 14 は土師器高坏である。11 と 12 は同一個体と考えられ、口縁部は緩やかに外に開き、脚底部は稜を持って外に開く。13・14 も同様な器形を呈するものと想定される。

１号土坑（第７図、図版３）

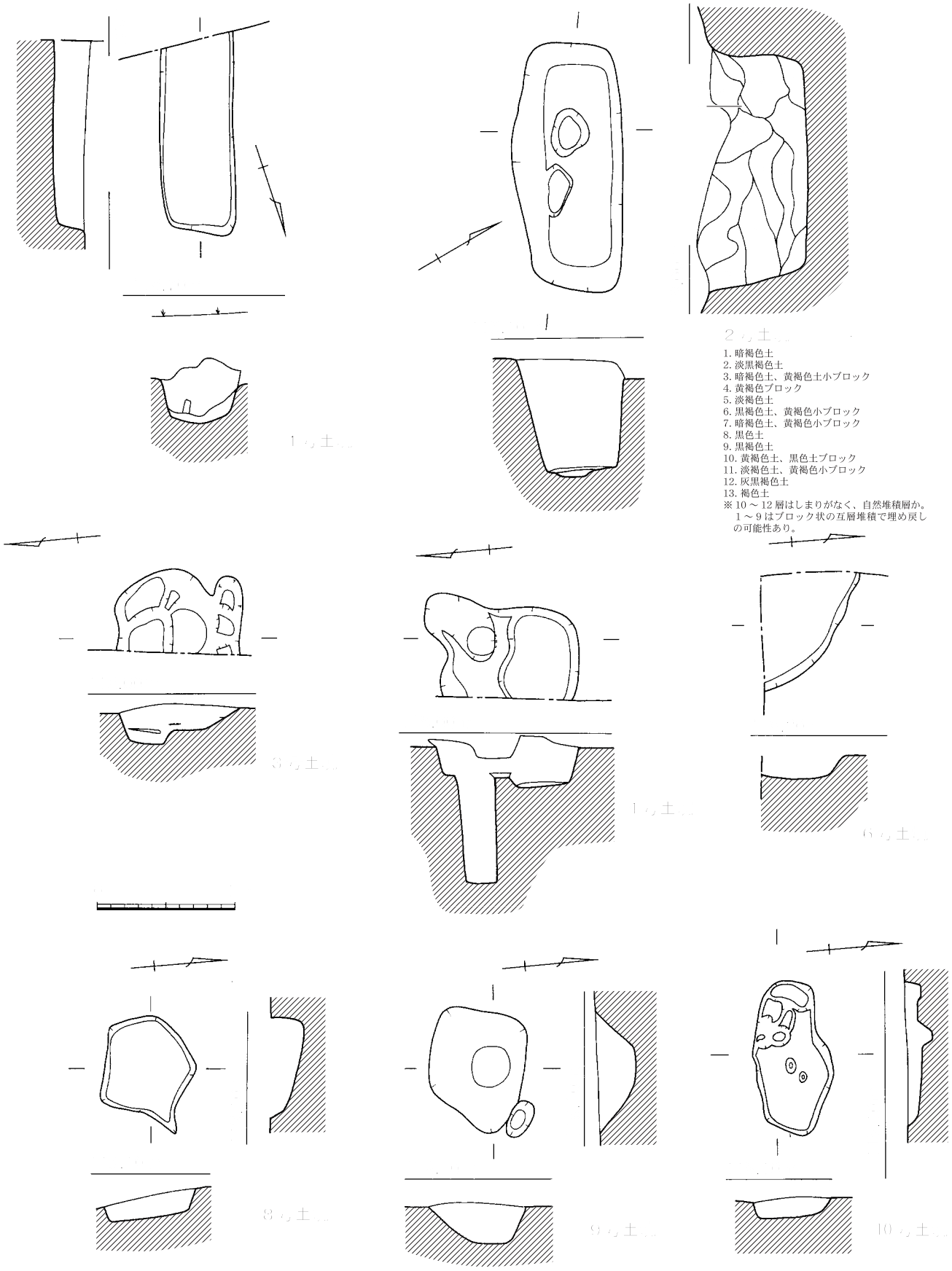
調査区南西側にて検出され、南半は調査区外へと伸びる。平面形は長方形状を呈し、確認面での規模は南北長軸 1.5 m＋α、東西短軸約 50cm、深さ約 25cm を測る。埋土は床面に黄褐色土が堆積し、上面に黒褐色土が見られる。遺物の出土が見られないことから時期は不明である。当初墓壙の可能性も想定したが、埋土が攪乱層と類似することなどから、比較的新しい遺構ではないかと判断した。

２号土坑（第７図、図版３）

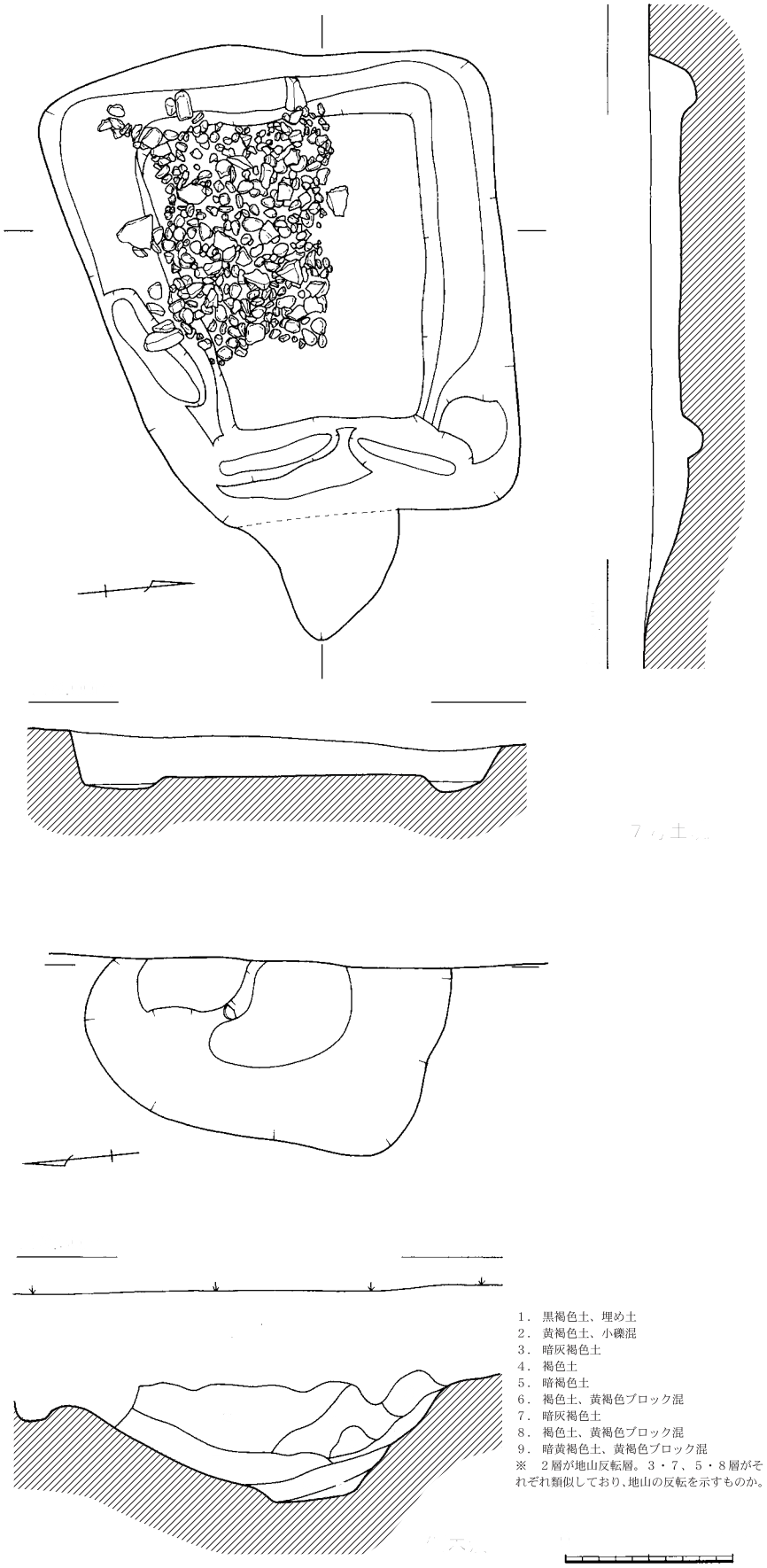
調査区西側にて検出され、平面形は長方形状を呈し、確認面での規模は南北長軸 1.8 m、東西短軸約 80cm、深さ約 80cm を測る。埋土は床面付近に 10 ～ 12 層のしまりのない土が堆積していることから、地山崩落に伴う自然堆積層で、その上面にブロック状の互層堆積が見られることから、人為的埋め戻しと判断される。床面は


1. 淡褐色土、黄褐色土小ブロック混
2. 黒褐色土
3. 淡褐色土、黄褐色小ブロック
4. 褐色土
5. 淡黒褐色土
6. 淡褐色土
7. 褐色土
8. 暗褐色土
※1～5層は黒色系でしまりが有り、6～8層は黄褐色系でしまり弱い。1～5層は2次堆積層、6～8層は使用時の地山崩落堆積か？
1. 黒色土（埋め土）
2. 淡黒褐色土
3. 淡褐色土、黄褐色土粒子混
4. 淡褐色土
5. 暗褐色土
6. 黒色土
7. 淡黒褐色土、黄褐色小ブロック混
8. 暗褐色土
9. 淡褐色土
10. 淡黒褐色土、黄褐色ブロック混
11. 灰褐色土

第 6 図　溝実測図（1/40）



第 7 図　土坑実測図①（1/40）



第 8 図　土坑・倒木痕実測図②（1/40）

られなかった。遺物は小破片が数点出土しているが、時期比定が可能な資料は得られなかった。

3 号土坑（第 7 図、図版 3）

調査区西側で検出された土坑で 4 号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約 90cm、東西約 60cm ＋ α を測り、深さは約 20cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

4号土坑（第 7 図、図版 3）

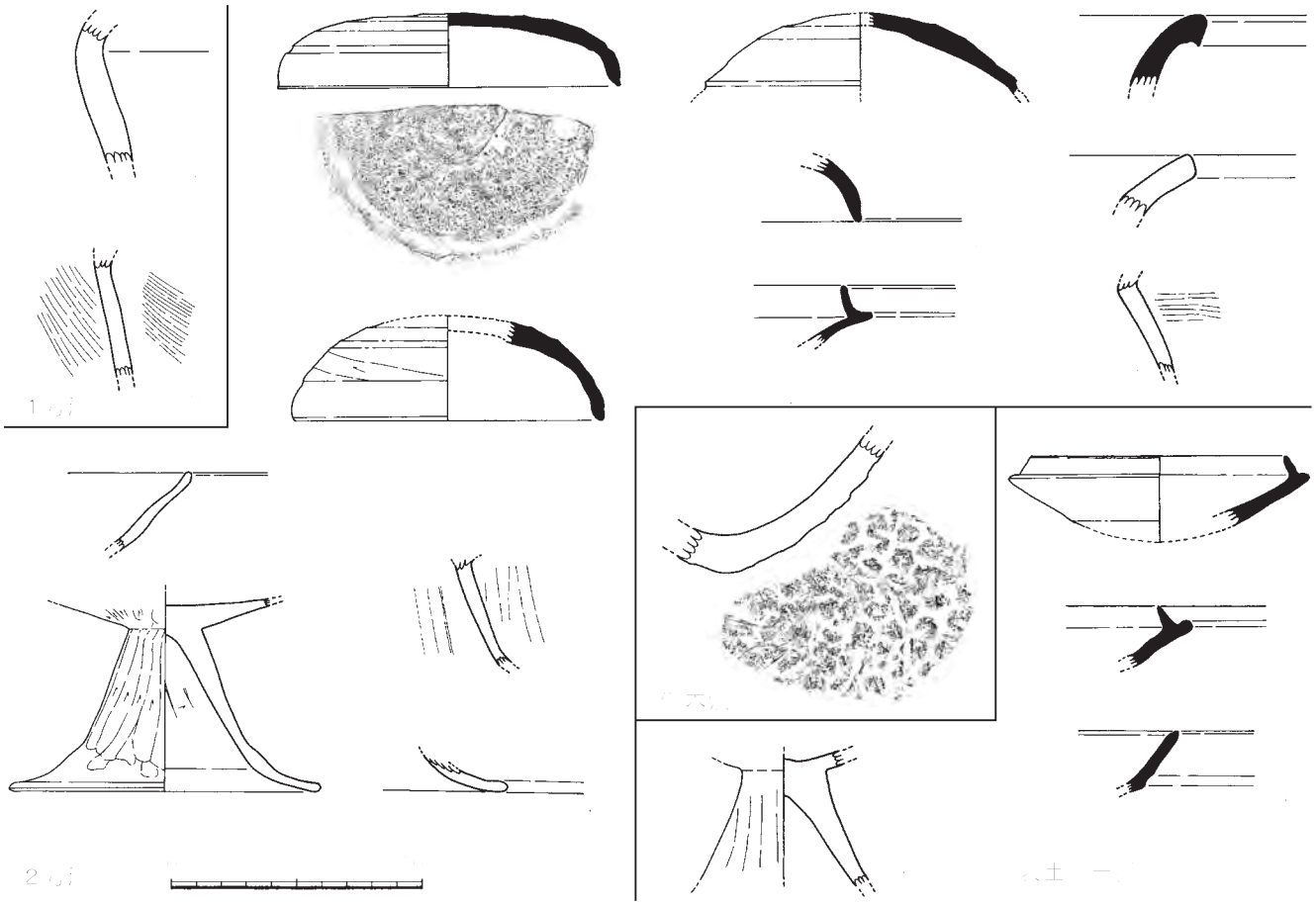
調査区西側で検出された土坑で 3 号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約 110cm、東西約 80cm を測り、深さは約 30cm を測る。北側に柱穴が重複している。遺物の出土は見られなかった。

6号土坑（第 7 図、図版 3）

調査区南西隅で検出された土坑で、1 号土坑に隣接する。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は南北約 70cm ＋ α、東西約 80cm ＋ α を測り、深さは約 20cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

7号土坑（第 8 図、図版 3）

調査区東側で検出された土坑である。平面形は方形を呈し、確認面での規模は南北約 2.7m、東西約 2.8 m を測り、深さは約 30cm を測る。土坑の周囲は溝状に掘り窪められており、床面は平坦を呈する。土坑南西側床面付近には小石が敷き詰められていた。埋土に地山ブロックが混じることなどから、近年の遺構ではないかと判断された。遺物は須恵器等の小片の混入が確認された。



第 9 図　出土遺物実測図（1/3）

8 号土坑（第 7 図、図版 3）

調査区南側で検出された土坑で 1 号溝に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約 70cm、東西約 80cm を測り、深さは約 20cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

9 号土坑（第 7 図、図版 4）

調査区南東側で検出された土坑で 1 号溝に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約 70cm、東西約 90cm を測り、深さは約 30cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

10 号土坑（第 7 図、図版 4）

調査区南東側で検出された土坑で 4 号土坑に隣接する。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北約 60cm、東西約 110cm を測り、深さは約 10cm を測る。遺物の出土は見られなかった。

倒木痕（第 8 図、図版 4）

調査区東側で検出された土坑で、平面形は不整円形を呈し、確認面での規模は南北約 2.2m、東西約 1.1m ＋ α を測り、深さは約 70cm を測る。土層を観察すると、2 層が地山と同一土層で、その下に褐色の埋土が埋没し、層位の反転が見られることから、倒木痕と判断した。なお、床面付近からは縄文土器の底部が 1 点出土したのみである。

出土遺物（第 9 図、図版 4）

15 は縄文土器深鉢の底部である。尖頭状の底部を呈し、やや器面は厚い。外面全面にはやや大振りで不揃いの楕円押型文が施される。内面はナデ調整である。

（3）その他の遺物

表土を除去時及び、全体の攪乱除去時に出土した遺物を一括して紹介する。

16 は土師器高坏の脚部である。17、18 は須恵器坏身である。いずれも口縁部を内傾させている。19 は須恵器無蓋高坏の口縁部か。口縁下半部に稜を有する。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、溝２条、土坑 10 基が確認された。

まず、これらの遺構の時期についてである。１号溝は、弥生土器の破片から弥生時代以降の時期に所属すると考えられるが、埋土が黒味の強い上面の堆積層と類似することから、比較的新しい可能性が考えられる。次に２号溝であるが、床面付近からまとまって出土している遺物から時期比定が可能である。須恵器坏身の口縁端部の段が殆どなくなっており、やや口径も小形化していることから、ＴＫ 43 前後の範疇に収まる。また、土師器高坏は脚部の開き具合から重藤編年９期に相当する。これら須恵器・土師器の特徴から概ね６世紀後半から末と捉えられる。土坑は遺物の出土が少なく時期比定が困難であるが、埋土の状態から７号土坑は比較的新しいものと考えられる。また、1、3、4 号土坑は１号溝埋土と類似する黒色系であることから、現時点では比較的新しいものと位置づけたい。そのほか、2・6・8 ～ 10 号土坑は２号溝埋土と類似する褐色系であることから、同時期あるいはその前後と考えたい。さて、倒木痕出土の縄文土器は楕円押型文の崩れ具合から縄文時代早期の田村式相当と考えられる。隣接する１次調査区で縄文早期の集石が確認されていることなどから、調査区周辺に生活跡が広がっていたことを示す資料と言える。

さて、今回の調査は台地縁部に位置しているため、Ⅱにおいて述べた過去の調査例に比べると遺構密度がかなり薄い。しかし、２号溝の６世紀後半～末の遺物の出土は興味深く、穴観音古墳の築造とほぼ時期を同じくしている。これまで、古墳期の生活遺構は２次調査・長者原田迎遺跡において確認されるのみで穴観音古墳の東側では確認されていなかった。今回の調査結果から、穴観音古墳を築造した集落が台地東側縁辺部にも展開している可能性が想定されよう。こうした意味でも今後の石井地区の集落変遷や立地を想定し、日田の古代史を考える上で大きな成果といえよう。

《参考文献》

田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ　1966

重藤輝行　「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 12 集　福岡県教育委員会　2000

第１表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第10図1	1号溝	弥生土器	甕	－	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	A,B,C	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第10図2	1号溝	弥生土器	甕	－	－	－	ﾊｹ	ﾊｹ	B,C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第10図3	2号溝	須恵器	坏蓋	(13.6)	－	2.9	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ､回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	A,B,C	良好	暗灰色	暗灰色	ヘラ記号有
第10図4	2号溝	須恵器	坏蓋	(12.2)	－	－	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ､回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	青灰色	青灰色	
第10図5	2号溝	須恵器	坏蓋	－	－	－	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ､回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第10図6	2号溝	須恵器	坏蓋	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	暗青灰色	暗青灰色	
第10図7	2号溝	須恵器	坏身	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第10図8	2号溝	須恵器	甕	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	青灰色	青灰色	
第10図9	2号溝	土師器	甕	－	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	A,B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第10図10	2号溝	土師器	甕	－	－	－	ﾊｹのちﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	B,C,D	良好	黄褐色	黄褐色	
第10図11	2号溝	土師器	高坏	－	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	A,B,C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第10図12	2号溝	土師器	高坏	－	(12.5)	－	ｹｽﾞﾘ､ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	A,B,C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第10図13	2号溝	土師器	高坏	－	－	－	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	外面に丹塗痕跡
第10図14	2号溝	土師器	高坏	－	－	－	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第10図15	倒木痕	縄文土器	深鉢	－	－	－	楕円押型文	ﾅﾃﾞ	A,B,C	良好	淡黄褐色	暗赤褐色	
第10図16	表土中	土師器	高坏	－	－	－	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	B,C	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第10図17	表土中	須恵器	坏身	(10.0)	－	－	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ､回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	青灰色	青灰色	
第10図18	表土中	須恵器	坏身	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第10図19	表土中	須恵器	無蓋高坏	－	－	－	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	B,C	良好	青灰色	青灰色	

※　A：角閃石　B：石英　C：長石　D：赤色粒子　E：白色粒子　F：黒色粒子　G：雲母　H：砂粒

調査区遠景（南から）

調査区全景（真上から）

写真図版 2

①調査完了風景（北西から）

② 1 号溝（西から）

③1号溝土層

④ 1 号溝遺物出土状況

⑤ 2 号溝（西から）

⑥ 2 号溝土層

⑦ 2 号溝遺物出土状況①

⑧ 2 号溝遺物出土状況②

① 1 号土坑（北から）

② 1 号土坑土層

③ 2 号土坑（北から）

④ 2 号土坑土層

⑤ 4 号土坑（真上から）

⑥ 6 号土坑（真上から）

⑦ 7 号土坑（西から）

⑧ 8 号土坑（北から）

写真図版 4

① 9 号土坑（北から）

② 10 号土坑（北から）

③倒木痕（西から）

④倒木痕遺物出土状況

9－2

9－3

9－4

9－5

9－8

9－12

9－15

9－16

9－17

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちょうじゃばるいせき
書名	長者原遺跡
副書名	－
巻次	－
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第73集
編著者名	渡邊隆行
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年８月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		地町村	遺跡番号					
長者原遺跡 ６次	ひたしおおあざおやま 日田市大字小山 あざおきはらばん 字沖原192番１	44204-6	651110	33°18′30″	130°54′26″	20060123 ～20060313	約110㎡	鉄塔建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
長者原遺跡 ６次	集落	古墳時代	溝	２条	土師器、須恵器	
			土坑	９基	弥生土器	

長　者　原　遺　跡

2006年８月31日

編　集　日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1

発　行　日田市教育委員会
〒877-8601　大分県日田市田島2-6-1

印　刷　山本印刷有限会社
〒877-0059　大分県日田市大日町3986-3